

第72回 国際理解・国際協力・多文化共生のための高校生の主張コンクール東京都大会 金賞

東京都立国際高等学校 3年

ユージョシュア

課題②

あなたが国連の総会議場で自由にスピーチすることができるとしたら、何を訴えるか。

副題

なし

もし私が国連の総会議場でスピーチをするなら、私はこのように訴えるだろう。

「多様なルーツをもつ人々が、いま自分が暮らしている社会で、“外から来た存在”ではなく、“共に生きる仲間”として、本当の意味で認められる世界をつくってほしい」と。私はオーストラリアと中国にルーツを持ち、日本で長い間生活してきた。日本語を話し、日本の学校に通い、日本の文化にも慣れ親しんでいる。しかし、何年暮らしていても、「本当にどこの出身?」「日本語うまいね!」「国籍はどこ?」といった言葉を、幾度となくかけられてきた。

もちろん私は、その言葉に悪意があるとは思えない。しかし、繰り返されるたびに、「私はこの国に何年いたとしても、本当の意味では受け入れられていないのかもしれない」という思いが心に積もっていった。

想像してみて欲しい。日常のなかで、学校でも、お店でも、初めて会った人からでも、同じようなことを聞かれる。そしてそのたびに「私はこの国の一員ではないのかな」と、自分の立ち位置を考えてしまうのである。

見た目や名前、話し方など、少しの違いで「あなたは“こちら側”の人間ではない」という線が引かれてしまう。そんな状況の中で、私に限らず、多くの移民や、難民、そして多文化的なルーツを持つ子どもたちに共通する感覚、それが「疎外感」であると私は考える。

私は日本で安全に暮らし、学び、良き友にも恵まれている。しかし、世界には、紛争や貧困、差別から逃れて、迫害から離れた新たな人生を築きたい人もたくさんいる。そうした人たちが、たとえ法的にその国の一員になったとしても、社会の中で「仲間」として扱われず、孤独や不安の中で暮らしている例は少なく

い。

どうすれば「心から迎えられる社会」、「心から認め合える社会」は実現できるのでしょうか。

その答えは、私のある体験の中で得られた。今年の春、私はオーストラリアの大学見学に行った。私はオーストラリアにルーツがあるので、そこでは私は「外の人」ではなかった。キャンパス内で開催されていた国際フェアでは、各国のフードブースがずらりと並んでいた。日本、イタリア、メキシコ、さらには中東やアジアのエキゾチックな味覚が楽しめるブースがあって、まるで世界一周旅行をしているような感覚だった。その光景で特に印象的だったのは、ブースの前で自然と立ち寄った人々が、国の出身の違いなどを全く意識せず、ただ美味しい料理と楽しい会話を共有していたことである。みんなが笑顔で、時にはお互いに料理の秘密を熱心に語り合い、文化やバックグラウンドの違いがむしろ新しい発見や興味深い交流のきっかけとなっているのを肌で感じた。私は、これだと思った。共通の趣味や食べ物などは人種なんて関係ないのだ。そこでは、「どこの国の人？」と聞く人は誰もいなかった。話の中心は、いつも異なる文化やバックグラウンドではなく、共通の話題であった。

この体験を通じて、私たちは多様な背景を持った人々が共に集まり、共通の興味や情熱を分かち合うことで、国の壁や違いが消えていくという事実を再認識した。多様性は分断を生むのではなく、むしろ新たな創造性や結束力を生み出す土台であるということが、この経験から得られた。

だから私は、国連という場でこう提案したい。

世界の政府や社会は、法的な保護だけではなく、“心の受け入れ”を進める努力をしてほしいと。学校での多文化教育、メディアでの多様な表現、日常の中にある「ちがいを自然なものとして紹介する仕組み。それらが、“所属”ではなく“つながり”を育てる土台になると信じている。

そして何よりも、国を超えて生きている人たちに対して、「あなたはここにいていい」「あなたはこの社会の大切な一員だ」と伝えること。

それは社会全体の責任であり、私たち一人ひとりの行動からも始められることであるはずだ。

違いが壁になるのではなく、橋になる社会へ。

私は国連の場で、その橋をかける第一歩として、こう訴えたい。

「どこから来たの？」ではなく、「共にこの社会をつくろう」と声をかけ合える世界を、私たちは実現しなければならない、と。

そして、私自身もその一歩を踏み出す人間でありたいと、心から思っている。